



いつのまにか、まぶたの裏が、ぼんやり赤くなっている。

——だれか電気をつけたのかな。それとも、もう朝？ いけない！ 早く起きなきゃ。

弘樹は、思いきって、重いまぶたを開いた。電気は消えているけど、部屋全体がぼんやりと明るい。すっごく静か。窓からのうすいひかりに照らされたポスターの女の子たちは、夜中だというのに、あいかわらず笑っている……。

だんだん頭がはっきりしてきた。

時計を見た。二時二五分。いつしゅん、昼間の二時かとも思った。でも、それには暗すぎるし、とにかく静か。やつぱり、まだまだ夜中だ。

——じゃあ、なんでこんなに、外が明るいんだろう……。そうだ！

どんだん頭がはっきりしてきた。

もう一度、目覚まし時計を見る。二時三〇分。目覚ましは朝四時にセットしてあるのに。すっごい！

弘樹は、毎朝ぬけ出るのにひと苦労な布団から、するりと飛びだした。カーテンを開けておいたのも、早起きのため。弘樹は、ほの明るく光る窓を開けた。

冷たい空気が、弘樹の顔につきささる。自分のはいた息が、雲のように目の前をおおう。

雲が引くと、そこにはまっ白な世界が広がっていた。

——やつぱり、つもったんだ！

弘樹は、夜だというのに、ぼんやりとねずみ色に光る空を見上げた。

もう雪は、やんでいた。

え入村定子